

中世哲学の源流

K・リーゼンフーバー著／村井則夫 矢玉俊彦 他訳

創文社刊 1995 年



【目次】

序

第一章 中世哲学研究の現況

第Ⅰ部 教父時代における中世思想の基礎づけ

第二章 使用と観想——文化と宗教の関係についての教父思想の二類型

第三章 ボエティウスの伝統——プラトン主義とアリストテレス論理学の中世への継承

第四章 ラテン中世における教父神学の遺産

第Ⅱ部 言葉と知識

第五章 アウグスティヌスにおける言葉と思惟

第六章 サン＝ヴィクトルのフーゴーにおける学問体系

第七章 ボーヴェのウィンケンティウスにおける教養理解

第八章 トマス・アキナスにおける言葉

第Ⅲ部 自由と至福

第九章 中世思想における至福の概念

第十章 ボナヴェントウラの自由論

第十一章 神の全能と人間の自由——オッカム理解の試み

第Ⅳ部 自然と存在

第十二章 被造物としての人間——教父時代および中世における創造論

第十三章 アウグスティヌスにおける自然理解

第十四章 トマス・アキナスにおける自然理解

第十五章 トマス・アキナスにおける存在理解の展開

第十六章 存在と思惟——存在理解の展開の可能性を探って

第十七章 トマス・アキナスにおける神認識の構造

第十八章 知性論と神秘主義——十三・十四世紀スコラ学の問題設定

あとがき

索引
